SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

風土・ジェンダー・テクスト：D.F.サルミエント『ファクンド』におけるオリエンタルな女体としてのトゥクマン

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2015-04-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 花方, 寿行
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00008196

風土・ジェンダー・テクスト
—D. F. サルミエント『ファクンド』における オリエンタルな女体としてのトゥクマン—

花　方　寿　行

19世紀アルゼンチンを代表する文筆家・政治家であるドミンゴ・ファウスティーノ・サルミエント（1811－1888）の主著『ファクンドまたは文明と野蛮 Facundo o la Civilización y barbarie』は、1845年に当時サルミエントがフアン・マヌエル・デ・ロサス軍事独裁政権による弾圧を逃れて亡命していたチリで発表されてから現在に至るまで、アルゼンチンの政治と社会を論ずる上で無視することのできない重要な作品であり続けている[*1]。特にアルゼンチンの抱える政治的な不安定さを、広大な平原パンパという特徴的な風土が形成する住民の性格に求め、パンパで活動する牧童ガウチョをその典型とした上で、ガウチョやそのリーダーである地方ボス（カウディーリョ）を支持母体とする連邦派と港湾都市ブエノスアイレスを基盤とする自由主義知識人層が支持する中央集権派との対立に、ヨーロッパ的＝都市的＝自由主義的＝文明とアメリカ的＝地方的＝保守的＝野蛮の衝突を見出し、それがアルゼンチン、ひいてはラテンアメリカの歴史を規定してきたとする思想は、マルティネス＝エストラーダをはじめとする後世の思想家に影響を与えたのみならず、ホセ・エルナンデスからレオポルド・ルゴーネス、ホルヘ・ルイス・ボルヘスといったアルゼンチンの文学者たちにも大きな影響を与えてきた。

一方近年の研究においては、サルミエントがガウチョに代表されるアルゼン

---

*1 『ファクンド』は様々な版を経て形成されてきたテクストであり、どれをもって決定版と見なすかは、ゴンサーレス＝エチェバリーアの言うように、判断が難しい（González Echevarría, *Mito y archivo.* traducción de Virginia Aguirre Muñoz. México D. F. : Fondo de Cultura Económica, 2000, p. 144.）。まずは1845年、チリの新聞『エル・プログレソ』紙に「序」から13章までが連載された。同年単行本にまとめられるに際して、14・15章と「覚書」が書き加えられる。1851年の第2版では、「序」と14・15章が削除され、代わりにバレンティン・アルシーナ宛書簡が序文として、また幾つかの文章が付録として加えられた。その後も版毎に様々な異同があり、現在でも完全なクリティカル・エディションが存在しないのが、研究者にとって頭痛の種である。本論文では、R・ヤーニ校訂のカテドラ版を基に、アヤクーチョ版やポルーア版を参考にした。

チン人の心性を形成するものとして風土決定論的な重要性を付与しているパンパを、『ファクンド』執筆当時には見たことがなく、イギリス人旅行者などが残した文献資料に基づいて記述していたこと、またパンパとその住民の「野蛮」性を示すために、それらがオリエントの風土や風俗といかに類似しているかを強調して描き、それによって当時英仏で植民地支配のために強い力を発揮していたオリエンタリズムの権威を利用していることなど、この作品が実際の観察に基づく分析というより、むしろ極めてブッキッシュな性格を備えた作品であることが指摘されてきている。かつてはアルゼンチンの風土や風俗という「現実」の具体的で同時代的な考察から歴史哲学を引き出していると見なされていた『ファクンド』だが、現在ではむしろロサス独裁政権打倒とその後の望ましい社会体制についてのサルミエントの考えを正当化するために、様々な先行文献を組み合わせて織りなされた歴史(イストリア)=物語的な織物として論じられることが一般的になっている[*2]。

筆者は既に他のところで、『ファクンド』におけるパンパ描写がいかにオリエンタリズムのディスコースを利用しているかについて論じている[*3]。本論文ではパンパとは異なる風土として描かれる内陸部の農業地域トゥクマンの自然描写やそこで展開するエピソードが、欲望の対象となる土地としてトゥクマンを描き出すという戦略にしたがって、オリエンタリズムや性的なメタファーを活用したやはり極めてブッキッシュなテキストとして構成されていることを明らかにしてゆく。

---

*2 バレネチェアは、サルミエントが実際にパンパを目にしてから執筆した『大軍における軍事遠征 La campaña en el Ejército Grande』(1852) では、描写がより詳細なものとなっていることを指摘している。Barrenechea, *Textos hispanoamericanos.* Caracas : Monte Ávila Editores, 1978, p.69. 参照。なおアルペリン=ドングイは『大軍における軍事遠征』と『ファクンド』を比較して、前者は題材と著者の距離が近すぎるために、後者に見られるようなアルゼンチンで起きている歴史的変化についての明確なイメージを欠いてしまっているとしている (Halperin Donghi, "Prólogo" de Sarmiento, *La campaña en el Ejército Grande.* edición, prólogo y notas de Tulio Halperin Donghi. México D. F. : Fondo de Cultura Económica, 1958, p.XLV.) が、これはむしろ本末転倒の解釈とみるべきだろう。

*3 花方寿行「D. F. サルミエントのオリエンタリズム」『ラテンアメリカ研究年報』17号 (1997)、pp.108－129. 参照。

1

それでは具体的にトゥクマンの描写を分析する前に、著者サルミエントと『ファクンド』についての基本的な情報をまとめておこう[*4]。ドミンゴ・ファウスティーノ・サルミエントは1811年2月15日、アルゼンチンのサン・フアン州に生まれる。両親は共に古くからのクリオーリョ（アメリカ生まれのスペイン系住民）の出で、独立戦争に従軍して留守がちだった父ホセ・クレメンテにはあまり親しみを持てなかったが、母パウラ・アルバラシンには深い愛情を抱いて育った。4人の姉の下、初めての男児として生まれたサルミエントは、父の不在もあり、早くから一家の長として振る舞うことを期待され、誇り高く育った。幼い頃から読書好きだったが、家が貧しかったために初等教育しか受けられず、早くから働き始める。以後半ば独学で身につけられた彼の教養は、エステバン・エチェベリーアやホセ・マルモルといった他のいわゆる1837年世代のアルゼンチン作家たちに比べて、混然としたものとなっている。

19世紀前半のアルゼンチンは、スペインからの独立後、自由主義者を中心とする中央集権派と保守的な連邦派の間で繰り広げられた内戦や反対勢力の弾圧によって、混乱した状況にあった。1820年代半ば、時の自由主義的中央集権派の大統領リバダビアに対して、各地の連邦派カウディーリョが反乱を起こしたのが、その後30年にわたる抗争の始まりだった。反乱を起こしたカウディーリョの中には、後にサルミエントの人生に大きく影を落とすこととなる、サン・フアン出身のファクンド・キローガも含まれていた。初期には両親や周囲の人々の影響もあり、連邦派に惹きつけられたサルミエントだったが、やがてそのファナティズムに疑問を抱くようになる。25年、メンドーサ出身のカウディーリョ、ホセ・フェリックス・アルダオがサン・フアンに侵攻し、ホセ・ナバーロが独裁的な支配を敷くようになると、反対勢力の追放が行われる。この時追放された者の一人が、サルミエントの叔父である司祭、ホセ・デ・オロであった。サルミエントはホセと共にサン・ルイスの小村に移り、ホセからラテン語やキリスト教教義を学びながら、地元住民に読み書きを教える学校を開く。26年には一店

---

*4 本節の記述は、特に注記のない限り、Anderson Imbert, Enrique. *Genio y figura de Sarmiento.* Buenos Aires : Editorial Universitaria de Buenos Aires, 1967、Yahniのカテドラ版*Facundo*への序文、およびアヤクーチョ版*Facundo*の年譜を参考にしている。

員として働き始めたが、徐々にカウディーリョや、モントネーラス（ガウチョによって構成される不正規兵）に対する反感を強める。27年、ホセ・サンチェスが実権を握ったのを受けてサン・フアンに戻るが、ファクンド・キローガがサンチェスを倒し、政権を掌握する。28年サルミエントは軍務に服するも、辞任。不服従を問題とされ投獄され、謝罪の末解放されるが、これが連邦派やカウディーリョに対する反感を決定づける。29年には中央集権派軍の一員として戦闘に加わるも、敗北。またも投獄された後一時サン・フアンに蟄居していたが、30年にはひとたびチリに難を逃れる。同年サン・フアンが再び中央集権派に掌握されると帰国、軍務についたが、31年ファクンド・キローガがまたもこの地を制圧。今度は31年から36年と長期に渡るチリ亡命を強いられ、この地で教員をはじめとする様々な職業に就く。英語を学び始めたのも、この時期であった。

1836年、病を得てサン・フアンに戻ったサルミエントは、ヨーロッパの情報に関心を持つマヌエル・キローガ・ロサスと親交を結び、彼と共にヴィルマン、シュレーゲル、レルミニエー、ギゾー、クーサン、ルルーを読む。地元の若者たちと文化活動を行う一方、1839年には女学校（Colegio de señoritas）を設立、また自由主義的な若手知識人の集団「アルゼンチンの若き世代」の精神に基づき、ブエノスアイレスでフアン・バウティスタ・アルベルディが刊行した雑誌『ラ・モーダ La Moda』に倣って、進歩、教育、民主主義、女性解放、コスモポリタニズム、反スペイン主義を標榜する雑誌『エル・ソンダ El Zonda』を発行、ジャーナリストとして最初の一歩を踏み出すが、この雑誌そのものは検閲を受け、6週間しか続かなかった。一方29年にブエノスアイレス州知事の座を獲得した連邦派のフアン・マヌエル・デ・ロサスが、中央集権派・自由主義者に過酷な弾圧を加えながら首都ブエノスアイレスを拠点に着実に勢力を伸ばし、30年代後半には国政を牛耳るようになってゆく。そのため1840年には中央集権派弾圧が再び激化し、投獄の憂き目に遭ったサルミエントは、またもチリ亡命を余儀なくされる。

1841年、サンティアゴに腰を落ち着け、チリ保守党のリーダーの一人であるマヌエル・モントの知遇を得る。チリ保守派寄りの立場で、『エル・メルクリオ El Mercurio』や『エル・ナシオナル El Nacional』といった新聞の編集に携わり、ジャーナリストとして活発に執筆活動を行うようになる。特に42年に行われたスペイン語文法をめぐる論争は、当時チリ知識人界の大御所であったアン

ドレス・ベリョを相手としたため、論客としてのサルミエントの名を一躍高めた[*5]。しかし43年、アルゼンチンでの生活に関する中傷文が出回ったことを受けて、最初の自叙伝の試みである短文「わが弁護 Mi defensa」を発表。42年の論争後『エル・メルクリオ』紙を離れ、『エル・プログレソ El Progreso』紙の責任編集者となっていたが、45年同紙に『ファクンド』を連載し、その文名を決定づける。

この間にも、サルミエントの教育活動は続いた。各種の学校開設に尽力したほか、1843年にはチリ大学人文学部の創設メンバーの一人に選ばれる。初代総長は先の論争の相手であったベリョである。45年10月、チリ政府の依頼を受けたサルミエントは初等教育制度の海外視察旅行に出発。ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ大陸の各国をめぐり、48年チリに帰国する。この旅行の途中で、亡命を強いられていたバルトロメ・ミトレ、フロレンシオ・バレーラ、エステバン・エチェベリーア、ホセ・マルモルといった、37年世代のアルゼンチン作家とも知り合う。フランスではギゾーやティエールと会見、アメリカではホレース・マンと親交を結ぶ。帰国後の48年にベニータ・マルティネスと結婚したが、彼女とは45年に既に一児をもうけた仲だった。1849年には視察旅行の成果である『民衆教育について De la educación popular』と『旅行記 Viajes』を、50年には代表作の一つである自伝的エッセイ『地方の思い出 Recuerdos de provincia』を発表。この間も祖国アルゼンチンを支配するロサス独裁政権へのペンによる攻撃は止まず、49年には腹を立てたロサスがチリ政府に身柄引き渡しを要求したほどだった。

1851年、バルトロメ・ミトレらと共にモンテビデオに向かい、ここでウルキサ率いる反ロサス軍に従軍記録者として参加する。翌52年遂にロサス政権は打倒されるが、まもなく今度は大統領となったウルキサとの間に反目が生じ、またもチリに亡命することになる。同年ウルキサ軍と行動を共にしていた時の体験に基づく『大軍における軍事遠征 La campaña en el Ejército Grande』を発表。

---

*5 しばしばこの論争は、ベリョとサルミエントの間で行われたものとされているが、ベリョは論争のきっかけとなった文章を発表しただけで、あとはベリョの弟子筋の若いチリ知識人との間で行われたものである以上、これは不正確な解釈である。またこの論争では、時代遅れの存在としてベリョを激しく攻撃したサルミエントだが、その前後にはベリョの詩作品や法学書を賞賛する文章も発表しており、ベリョとの間に全面的な敵対関係があったわけではない。Carrilla, *Lengua y estilo en Sarmiento.* La Plata : Universidad Nacional de La Plata, Facultad de Humanidades y Ciencias de la Educación, 1964, pp.39－42. 参照。

アルゼンチンに戻っては投獄を含む迫害を受け、チリにまた亡命するという経緯を何度も繰り返した末、1855年遂にブエノスアイレスに腰を下ろす。当時国防相（ministro de Guerra y Marina）であったミトレの指名によって『エル・ナシオナル』紙の編集者となり、ブエノスアイレス大学の憲法学教授に任命される。

この頃からアルゼンチンの政情も落ち着きを見せ始め、サルミエントは政治家としてのキャリアを築き始める。1856年にはブエノスアイレス市評議会のメンバーに加わり、教育局長として初等教育拡充に力を注ぎ、教育関係の著作の翻訳や、公立学校への外国語教育導入を推進。57年には上院議員に、60年には内務及び外務大臣に任命され、憲法改正会議にも参加する。しかしサン・フアンで親友アントニオ・アベラスタインが銃殺刑に処せられたことに抗議して大臣を辞職。1862年にはサン・フアン州知事に就任することになるが、地元のカウディーリョ、チャチョ討伐における行き過ぎを批判される。64年州知事職を辞任する代わりに、チリ・ペルー駐在アルゼンチン全権大使に任命される。65年からはニューヨーク駐在を命じられ、エマーソンやロングフェローと知り合う。67年にはパリ万博も見にゆく。68年、ミシガン大学[*6]から名誉博士号を授与される。この年ブエノスアイレスへ向かう帰りの船上で指名を受け、帰国後の10月にアルゼンチン共和国大統領に就任する。以後大統領職にある間、以前からの持論であった移民奨励などの政策を実行に移す。

しかしアルゼンチンの政情不安は収まらず、暗殺未遂事件や各地での反乱の末、1874年10月、かつての盟友ミトレ率いるクーデターの結果、サルミエントは大統領職をニコラス・アベリャネーダに譲る。この後もサルミエントの政治活動は止むことなく、故郷サン・フアンの上院議員やブエノスアイレス州の教育庁長官、アベリャネーダ政権下での内務大臣など、様々な公職に就く。1880年には再度大統領選に出馬するも、落選。84年には政府の命を受けてチリに赴き、世界の名著のスペイン語への翻訳遂行を目的として、アルゼンチン、チリ、ウルグアイ、コロンビアの間で結ばれた協定に調印。これ以降もジャーナリスティックな活動を続けてはいたが、健康状態の悪化には勝てず、パラグアイのアスンシオンへの転地療法も空しく、この地で1888年９月11日死去する。サルミエントが『ファクンド』などの著作で主張し、政治家として実行に移した親欧米・反先住民政策はいまだに賛否両論の的となっているが、その教育関係に

*6 アヤクーチョ版年譜ではアン・アーバー大学となっているが、ここでは他の文献の記述に従う。

おける尽力は高く評価され、彼の命日はアルゼンチンでは「教師の日」とされている。

本論文で扱う『ファクンド』は、サルミエントの代表作であり、風土の描写と政治的意図が極めて密接に、しかも意識的に関連づけられているという点において、19世紀イスパノアメリカ文学に特異な位置を占めている。時のロサス政権を批判する方向性は同時代の多くの亡命作家と共通しているが、サルミエントはロサスを直接主題に選ばず、彼によって暗殺されたとされるカウディーリョ、ファクンド・キローガの伝記を通して、ロサスの支持層であるガウチョの心性を批判する道を選んだ。その背景には、サルミエントの独特の歴史観があった。

サルミエントのディスコースは、まず彼が高く評価した唯一のスペイン作家であるマリアーノ・ホセ・デ・ララのコストゥムブリスモに影響を受けている。様々な社会集団の特徴を、それを代表する「典型」的な個人に集約し、その姿や行動を外部から視覚的・客観的に観察・描写する形で提示するのが、コストゥムブリスモである。『ファクンド』第2章におけるガウチョの4典型の紹介は、まさしくコストゥムブリスモの手法を用いて行われている[*7]。社会集団（を代表する人物）を視覚的に捉え、枠組みの中に囲い込んで提示するコストゥムブリスモは、18世紀に発達する管理の手段としてフーコーが注目した「活人画」の文学版である[*8]。フリオ・ラモスは、フーコーを援用しながらサルミエントの他者表象を分析しているが、この切り口はコストゥムブリスモ全体の分析に応用可能なものである[*9]。

とはいえサルミエントは、第2章でのように典型を提示するだけにとどまらず、その中でも特別な個人であるカウディーリョ、ファクンド・キローガに注目して、その伝記を執筆する。しかしこれは、コストゥムブリスモからの断絶を意味しない。ここでいう「特別」は、属する社会集団に対して「異質である」

---

*7 Salomon, *Realidad, ideología y literatura en el "Facundo" de D. F. Sarmiento.* Amsterdam : Editions Rodopi, 1984, pp.91 − 147. および Verdevoye, "Costumbrismo y americanismo en la obra de D. F. Sarmiento", *Sur*, no. 341, julio-dic., 1977, pp.55−69. 参照。またコストゥムブリスモに限定されない形でララとサルミエントの影響関係を論じたものとして、Lorenzo-Rivero, *Larra y Sarmiento : Paralelismo históricos y literarios.* Madrid : Guadarrama, 1968. がある。

*8 フーコー『監獄の誕生』田村俶他訳、新潮社、1977、152−153頁。なお、文学作品におけるコストゥムブリスモ風の描写を指すスペイン語の表現「風俗画 cuadro de costumbre」は、コストゥムブリスモと「活人画」の連続性をより明確に示している。

*9 Ramos, "Saber del otro : Escritura y oralidad en el *Facundo* de D. F. Sarmiento", *Revista Iberoamericana*, vol. 54, no. 143, abril-junio, 1988, p.566.

という意味ではない。サロモンが指摘するように、サルミエントはミシュレやジョフロア・サンティレールの流れに従い、ある社会集団の精髄とも言えるようなモデル、一般例ではなくプロトタイプであるような「典型」としての、「特別な個人」に注目するのである[*10]。

サルミエントによれば、ファクンド・キローガのような歴史上の重要人物は、他の者とは異質な個性・能力によって、その地位を獲得したのではない。むしろある地方の住民の気質を、その「典型」として長所も短所も十全に発揮してみせたために、歴史に足跡を残したのである。この考えに従えば、歴史上の重要人物の伝記は、ある時代の社会構造や、各集団の利害の衝突を、抽象化に陥ることなく、かつ美的な効果ももたらしながら描き出すのに最適なものとなる。バレネチェアが指摘するように、サルミエントの主著が伝記作品という形式をとることが多いのは、こうした考えがあってのことなのである[*11]。

したがってファクンド・キローガの個人史は、ガウチョという社会集団の行動様式を、典型的な形で表現したものに他ならない。そしてガウチョは、彼らが生活する地方の自然環境と、その影響下に発達してきたその地方特有の生活様式の産物である。各地域の自然環境と住民の性格、個人の生涯が一体となり、過去から未来へ向けて展開してゆくものとして捉えられた歴史――モンテスキューやヴィーコ、ヘルダーの影響下に形成されたこうした歴史観が、サルミエントのものであった[*12]。サルミエントはこの考えを、『ファクンド』序文にお

---

*10 Salomon, *op. cit.*, p.122.

*11 Barrenechea, *op.cit.*, pp. 16－19. なおボレーリョは、複雑な発達過程を辿る個人の精神を追跡するのではなく、生まれながらにして性格や行動様式の定まった、タイプとしての人物の生涯を辿るサルミエントの伝記記述に、プルタルコスをはじめとする古典作家の影響を見出している。Borello, "«Facundo» : Heterogeneidad y persuación", *Cuadernos Hispanoamericanos*, no. 263－264, mayo-junio, 1972, pp.295－297. 参照。またマルティネス＝エストラーダは、個人の伝記を通して「歴史」を書くというサルミエントの手法を、抽象化を苦手とし、具体的な人物に即して歴史を把握することを好む彼の気質に由来するものとしている。Martínez Estrada, *Sarmiento*, Buenos Aires : Argos, 1946, pp.127－132. 参照。

*12 Salomon, *op. cit.*, pp.5－6. およびAnderson Imbert, *op. cit.*, pp.21－22.

*13 カテドラ版 *Facundo*, p.48. 参照。とはいえサルミエントは風土決定論について、必ずしも最初から一貫した考えを示していたわけではない。彼はかなり早くから、おそらくはキネの翻訳によって、風土の影響に関するヘルダーの論を知っていたようだが、1841年の段階では、ある文章でこの影響を重視したかと思うと、別の文章では否定的な態度を示している。しかし1844年になると、ブラジルに関連して再び風土の住民精神への影響を強調する文章を書いており、翌1845年の『ファクンド』では風土の住民精神への影響が冒頭から強調されることになる。Barrenechea, *op. cit.*, pp.28－30. 参照。カリーリャはサルミエントがキネの翻訳のみではなく、クーサンやジョフロイの著作を通してヘルダーの思想に接していた可能性を示唆している。Carilla, *op. cit.*, p.18. 参照。

いて、自ら明確に示している[*13]。

一方サルミエントにとってロサスは、アルゼンチンの風土が形成したガウチョ精神の「自然」な現れではなく、それが権謀術策によってカモフラージュされた「人為的」な存在である。サルミエントが本来の批判の対象である独裁者ロサスではなく、既にこの世を去ったファクンド・キローガの分析を試みるのは、アルゼンチン社会の抱える問題を考察するには、まずその「自然」な現れを分析する必要があると考えるからである[*14]。

『ファクンド』全体の構成は、既に注1で述べたように断定的に語ることができないとはいえ、おおむね以下の通りである。まず序において、ロサス政権が批判され、この独裁制をもたらしたアルゼンチンの社会的条件を知る必要が訴えられる。第1章から第3章ではこれを受け、アルゼンチンの風土とガウチョの気質・生活様式に関する総論が展開される。第1章はアルゼンチンの地理と、それが形成する住民――サルミエントはこれをパンパとその住民ガウチョに単純化する――の性質を論ずる。第2章では、アルゼンチン国民文学創出の可能性が述べられ、有名なガウチョの4類型が「活人画」として提示される。第3章はガウチョの社会生活の特徴を紹介する。かくしてアルゼンチンの風土と、その影響下に形成された住民の心性がまとめられた後、第4章「1810年の革命」では1810年前後のアルゼンチン独立に絡む歴史的状況が整理される。そして第5章「フアン・ファクンド・キローガの生涯」から、いよいよキローガの生涯が物語られてゆく。この伝記パートは、キローガ暗殺を扱う第13章「バランカ＝ヤコ！」で幕を下ろし、第14章・第15章ではその後ロサスが支配体制を固めてゆく様が描かれる。ここではロサスの独裁恐怖政治が直接批判され、これに取って代わるべき未来の政府の青写真が示される。

既に述べたように、サルミエントがアルゼンチンを代表する風土として特権化して扱うのは平原部パンパであり、『ファクンド』ではおおむねあたかもアルゼンチン全土がパンパであり、住民はガウチョ、主たる産業は牧畜であるかのように提示する言説が展開される。その中で牧畜以外の産業に依拠する例外的な都市として挙げられるのが、農業を基幹産業とするサン・フアン、メンドーサとトゥクマン、そして港湾都市であり様々な産業を擁する首都ブエノスアイ

---

*14 Barrenechea, *op. cit.*, p.65.

*15 Sarmiento, *Facundo. Civilización y barbarie.* edición de Roberto Yahni. Madrid : Ediciones Cátedra, 1993(2a ed.), p.65. 以下本章における『ファクンド』原文からの引用は全てカテドラ版からのものとし、煩瑣を避けるため引用・言及の後に頁数のみを記すこととする。

レスである[*15]。このうちブエノスアイレスは外側から視覚的に描写されることなく、歴史の主体として擬人化して描かれることによって、フーコー的な視覚による国内の他地域への支配力を付与されており、サルミエント自身の出身地であるサン・フアンは、ブエノスアイレスによる中央集権的な支配を否定することなく、かつ被支配者として表象されることも避けて、この後大きく扱われることはない。ファクンド・キローガの出身地として「サン・ルイスとサン・フアンの町の間 entre las ciudades de San Luis y San Juan」の「広大な荒野 un dilatado desierto」が言及されるだけである（127)。メンドーサについてはその後舞台として登場することはなく、視覚的な描写もない。

これに対して見るものと見られるもの、支配＝被支配の関係が、性的なメタファーを伴って提示され、それによって他の地域とは大きく異なる描き方がされているのが、第７章におけるトゥクマンの描写と、そこを舞台にするエピソードである。

2

ノエル・サロモンが詳細に分析しているように、サルミエントはトゥクマンの描写を執筆するに当たって、同じ37年世代の作家でありトゥクマンに住んでいたこともあるフアン・バウティスタ・アルベルディの『トゥクマンに関する描写的覚書』(1834）と、『ファクンド』中で言及もされるイギリス人大尉ジョゼフ・アンドリューズの旅行記（1827)、エピグラフで引用しているデンマーク出身、フランス在住の地理学者で、地理学協会創設者の一人でもあるマルト＝ブルンの著作を参照している[*16]。サルミエントは1845年当時、この章で描かれるトゥクマンもアコンキハも訪れたことはなく、彼の描写はこれらの文献資料に完全に依拠するものであった。サロモンは、故郷サン・フアン周辺の荒野を念頭に置いて行うことも可能であったろうパンパの描写と比較しても、トゥクマンの描写で利用される「彼（サルミエント）の情報がより「ブッキッシュ」であったと断ずることも可能だろう」としている[*17]。

さて第７章では、他の地方の紹介と同じく、まずはトゥクマンの自然環境が

[*16] Salomon, *op. cit.*, pp.75－90. なお、エピグラフの出典については、カテドラ版、アヤクーチョ版の注も、サロモンも明らかにしておらず、花方も確認できていない。したがってこれがマルト＝ブルンの著作からのものであるというのは、あくまでサルミエントの記述を信用してのことである。

[*17] *Ibid.*, p.76. 括弧内引用者。

鳥瞰図的に描写される。

> "Es Tucumán un país tropical en donde la naturaleza ha hecho ostentación de sus más pomposas galas ; es el edén de América, sin rival en toda la redondez de la tierra. Imaginaos los Andes cubiertos de un manto verdinegro de vegetación colosal, dejando escapar por debajo de la orla de este vestido, doce ríos que corren a distancias iguales en dirección paralela, hasta que empiezan a inclinarse todos hacia un rumbo, y forman reunidos un canal navegable que se aventura en el corazón de la América." (266)
>
> 「トゥクマンは、自然がその最も華麗な盛装を誇示する、熱帯の地域である。丸い地球上全てを見ても並ぶものなき、アメリカのエデンだ。巨大な植生の暗緑色のマントに覆われたアンデス山脈を想像したまえ。山々はこの服の裾飾りの下から、十二の川を流れ出させているが、これらは均しい距離を置いて平行する方角に流れてゆき、やがて全てが一つの方向へと曲がり始め、合わさって、アメリカ大陸の心臓部へと乗り込んでゆく、航行可能な運河を形成する。」

まず河への言及から記述が始まるところは、アンドリューズの描写と一致している。しかし旅人の視点から捉えられたアンドリューズのピクチャレスクな情景描写とは異なり、鳥瞰図的にトゥクマンを紹介するのは、アルベルディの記述に則っている。アンデス山脈から下ってくる河の流れについての言及は、アルベルディから受け継がれたものである[*18]。サロモンが指摘するように、ここにも交通手段としての河川を重要視するサルミエントの経済観が反映されている[*19]。

続いて記述は森の描写へと移行する。この順番も、アンドリューズのものと一致している[*20]。その導入としてサルミエントは、「そこ（森）では、インドの豪奢がギリシャの優美を身に纏っている。 en ellos las pompas de la India están revestidas de las gracias de la Grecia.」(266・括弧内引用者）と述べる。サロモンはこの表現に、マルト＝ブルンおよびシャトーブリアンの『アタラ』序文の

[*18] *Ibid.*, pp.78－80.
[*19] *Ibid.*, p.80.
[*20] *Ibid.*, p.81.

影響を見出している[*21]。

サルミエントの森の描写は、以下のようなものである。

> "El nogal entreteje su anchuroso ramaje con el caoba y el ébano ; el cedro deja crecer a su lado el clásico laurel, que a su vez resguarda bajo su follaje el mirto consagrado a Venus; dejando todavía espacio para que alcen sus varas el nardo balsámico y la azucena de los campos.
>
> El odonígero[sic.] cedro se ha apoderado por ahí de una cenefa de terreno que interrumpe el bosque; y el rosal cierra el paso en otras con sus tupidos y espinosos mimbres.
>
> Los troncos añosos sirven de terreno a diversas especies de musgos florescientes, y las lianas y moreras festonan, enredan y confunden todas estas diversas generaciones de plantas." (266－267)
>
> 「胡桃はその幅の広い枝葉を、マホガニーや黒檀と織り合わせる。セドロはその傍らに古典的な月桂樹が生えることを許し、こちらはといえばその茂みの下に、ヴィーナスに捧げられた天人花を守る。芳香を放つ甘松と野の百合がその茎を伸ばすために、まだ余地を残しながら。
>
> 香しいセドロはかしこに、森の区切れを成すフリル状の土地を我がものとしている。薔薇の茂みが別のフリルにて、その密生した、棘だらけの小枝をもって道を塞いでいる。
>
> 齢を重ねた幹は、様々な種類の花咲く苔のために地面のかわりとなっており、蔓植物と桑が、これらのあらゆる異なる世代の植物を、花綱で飾り、絡ませ、混じり合わせる。」

胡桃、セドロ（シーダー杉）そして蔓植物の絡みついた古木は、アンドリューズの描写に登場している要素である。一方月桂樹、天人花、百合は、アルベルディの描写に登場する。サルミエントの描写は、聖書やギリシャ神話、新古典主義文学から採られた定型化した表現を多用することで、サロモンの表現を借りれば、これらを「文学的植物」に変えている[*22]。

文学的伝統の想起は、サルミエントに限られたことではない。トゥクマンを最初に紹介するに当たってサルミエントは、この土地を「アメリカのエデン」

---

*21 *Ibid.*, p.89.

*22 *Ibid.*, pp. 81－82.

と呼んでいた。アンドリューズはトゥクマンの森にミルトンの『失楽園』を想起し、アルベルディもまたこの土地を「エデン」と呼んでいる[*23]。彼らの連想の背景に、やはり新大陸にエデンを重ね合わせた『アタラ』序文の影響があることを、サロモンは指摘している[*24]。

シャトーブリアンの影響は、サルミエントにとっても無縁ではない。彼の森の描写においては、木々が互いに支え合い、調和を保って存在している様子が強調されている。サロモンが指摘するように、この共存共栄する善き自然というイメージは、アンドリューズやアルベルディにはなく、むしろ『アタラ』やベルナルダン・サン＝ピエールの『ポールとヴィルジニー』の流れに与するものである。サルミエントの描写は、特に『アタラ』のミシシッピー河流域の描写から、強い影響を受けている[*25]。

『ポールとヴィルジニー』や『アタラ』は、アメリカ大陸を舞台に文学を成立させるためのモデルとして、19世紀イスパノアメリカ作家に強く意識されていた。しかしここで注意する必要があるのは、これらの作品が恋愛小説だという点である。柳原孝敦が指摘するように、『ポールとヴィルジニー』と『アタラ』は、共にヨーロッパ植民地主義と連動しつつ、エキゾチックな舞台背景である植民地に、文化としての恋愛を移植するディスコースを作り上げていた。そして19世紀イスパノアメリカ作家は、そこから風景描写という要素と共に、その土地固有の文化を形成する「恋愛ドラマ」というプロットを取り出し、自己領有のために利用してゆくことになる[*26]。その意味でも、サルミエントが両作に関心を持っていて、不思議はない。また繰り返される「フリル cenafa」への言及は、トゥクマンの森を女性の衣装、ひいては女性に擬える機能を果たしている。

ここで重要なのは、サルミエントがトゥクマンの描写を執筆するに当たって、

---

*23 *Ibid.*, pp. 81－82.

*24 *Ibid.*, p.82.

*25 *Ibid.*, pp.83－84.　ただしシャトーブリアンはこの描写において、森を建築物に準えて描いているが、サルミエントにはこの要素はみられない。一方アンドリューズの描写では、森が廃墟と重ね合わせて描かれている（*Ibid.*, pp.82－84.）。森を建築物に重ね合わせてイメージするのは、ゴシック・リバイバルに典型的な発想である。

*26 柳原「恋愛、植民地、小説」、中島成久編『「植民地主義の再検討」研究会2001年度ワーキングペーパー』法政大学比較経済研究所、2002, 45-49頁。なお、恋愛小説とナショナル・アイデンティティの連動性を論じたものに、Sommer, *Foundational Fictions*, Berkeley, Los Angeles, Oxford : University of California Press, 1991. がある。ただしゾマーは同書の第2章で『ファクンド』を取り上げているのだが、トゥクマンのシーンを扱っていないばかりか、なぜか恋愛とも結びつけていない。

一次資料であるアンドリューズやアルベルディの記述以上に、同じアメリカ大陸を舞台にしているとはいえ、全く違う地方を扱ったこれらの恋愛小説を利用していることである。後に改めて確認するように、トゥクマンの描写を恋愛小説の記憶と結びつけることは、その性的なメタファーを機能させてゆく役割を担っているのである。

サルミエントは続いて、蝶や鳥の描写に移る。ここではトゥクマンの魅力は、宝飾品的な華麗さとして強調されている。

> "Sobre toda esta vegetación que agotaría la paleta fantástica en combinaciones y riqueza de colorido, revolotean enjambres de mariposas doradas, de esmaltados picaflores, millones de loros color de esmeralda, urracas azules, y tucanes naranjados." (267)
>
> 「色調のコンビネーションと豊かさで、幻想的なパレットをも使い尽くすであろうこの植生全ての上を、金色の蝶の、エナメルの蜂鳥の群れが、数百万羽のエメラルド色をした鸚鵡、青い鵲、オレンジ色をした鬼大嘴が飛び回っている。」

ここでも資料の逆転が行われている。アンドリューズにおいては森の静けさが強調され、アルベルディでは滝や急流の水音と並んで、鳥の声が言及されるだけである[*27]。鳥の種類を列挙しながら森の豊かさを強調しているのは、やはり『アタラ』序文なのである[*28]。

この逆転は、次の段落では、いかにもサルミエントらしい誇張を伴って行われる。サルミエントは、トゥクマンの森の魅力に取り憑かれたアンドリューズ「少佐」が、朝から森の中に分け入っては、「錯乱し、彼を支配する恍惚に心奪われて delirando, arrebatado por la enajenación que lo dominaba」、茂みの奥へ奥へと彷徨ってゆき、家に帰り着いた時にはいつの間にか服は破け、体も傷だらけになっていたものだったというエピソードを述べる (267)。アンドリューズが語っているとされるこのエピソードは、実は彼の旅行記には全く存在しな

---

*27 サルミエントは鳥の声を、滝の音のように大きいとしている (267)。ここにはアルベルディの影が認められるが、滝や急流の水音や鳥の声が聞こえるとしてるアルベルディとは、ニュアンスは全く異なる。Salomon, *op. cit.*, p.85. 参照。

*28 *Ibid.*, pp.84－86.

いものなのである[*29]。サルミエントは続いて、トゥクマンの町を取り囲むオレンジ林の描写に移る。隣接関係を重視すれば、アルベルディはここで柑橘類の芳香に酔い騒ぐ鳥に言及しており、サルミエントにはこの言及がない。しかしサロモンも指摘するように、芳香に酔った鳥がアンドリューズ「少佐」の錯乱に変化したと見なすのは、無理がある[*30]。

捏造されたエピソードは、一体どのような機能を担っているのだろうか。ここではヨーロッパ人男性の心を捕らえ、虜にする、女性的な存在としてのトゥクマン＝自然が強調されている。男性が恍惚としながら、我を忘れ、「森」の奥へと突入を繰り返すという記述の露骨なまでに性的なメタファーは、改めて強調するまでもないだろう。そしてオレンジ林への言及を経て、同じ段落の半ばでは、トゥクマンを代表するものとして、遂に人間の女性が現れる。

> "Los rayos de aquel sol tórrido no han podido mirar nunca las escenas que tienen lugar sobre la alfombra de verdura que cubre la tierra bajo aquel toldo inmenso. ¡Y qué escenas! Los domingos van las beldades tucumanas a pasar el día en aquellas galerías sin límites (...) " (268)
>
> 「あの熱帯地方の太陽の光は、かの巨大なる天幕の下で大地を覆う緑の絨毯の上で起こる情景を、決して見ることができなかった。それも何という情景か！　毎日曜日、トゥクマンの美女たちが、あの果てしない回廊で一日を過ごしに行くのだ（後略）。」

サルミエントのピクニックの描写は、マルト＝ブルンの記述に依拠している[*31]。しかしマルト＝ブルンの記述では、ピクニックを楽しむのは男性複数形（即ち男性のみか、男女混合の集団）の「トゥクマンの住民 Les habitants de Tucumán」であるのに対し、サルミエントは「トゥクマンの美女たち las beldades tucumanas」と、はっきり女性に限定している。

[*29] *Ibid.*, p.86. なお、サルミエントはアンドリューズの階級を大尉から少佐に格上げして記述している。

[*30] *Ibid.*, p.86. なお、オレンジ林への言及は、アンドリューズ、アルベルディ、マルト＝ブルン、全員の記述に存在する（*Ibid.*, p.87.）。アンドリューズはオレンジ林を『千夜一夜物語』と結びつけるが（*Ibid.*, p.88.）、サルミエントもこれを踏襲している（268）。なお、サロモンはサルミエントのオレンジ林の描写に、シャトーブリアン『キリスト教精髄』の影響も見出している（*Ibid.*, p.89.）。

[*31] *Ibid.*, p.89.

ここでは「太陽の光」の視線から隠された場所でピクニックが行われていることになっている。確かに直射日光を避けて木陰でピクニックを行うことは、アルゼンチン北部の熱帯雨林に近い地域にあるトゥクマンでは快適な過ごし方であろうが、日光が全く当たらない（「太陽の光は…決して見ることができなかった」）という表現は、そのまま受け取るには大げさである。これではジャングルの闇の奥でピクニックをしていることになってしまう。ここでも重要なのは、古典文学においてアポロンという男性神と結びつけられる太陽が、たとえ実現しないとしても（性的）支配の欲望をもって視線を向ける対象として「トゥクマンの美女たち」が登場していることである。そして彼女たちが男性の視線から隔離された天幕（toldo）の下、広大な回廊（galería）をそぞろ歩きするという表現で暗示されるのは、オリエント風の後宮イメージである。

さて、ここでトゥクマンの紹介は終わり、ファクンド・キローガの伝記が再開される。ファクンドがトゥクマンを占領すると、捉えられた兵士たちの命を救うために、若い娘たちから成る代表団が派遣される。ファクンドは彼女たちを丁重に迎えるが、その要望を聞き入れることなく、銃殺刑が執行される。続いてファクンドが若く美しい未亡人に懸想をして、その父親に拒絶されるというエピソードが紹介される。「ファクンドは何をこの婦人に求めていたのか？
それは彼の視線を惹きつけた美しい未亡人で、ファクンドは彼女を伴侶として求めにやってきたのだ！ ¿Qué quería Facundo con esta señora?... ¡Era una hermosa viuda que había atraído sus miradas y venía a solicitarla!」(274) という記述に、再び（性的）支配への欲望を伴う視線が登場してくる。

トゥクマンは宝飾品に飾られた、魅力的な女性のような土地であり、外部からきたものの心を捉え、その欲望の対象となる存在である。その自然はオリエント風、といってもパンパ描写で引き合いに出された荒野・砂漠としてのオリエントではなく、ソロモンの雅歌や『千夜一夜物語』が想起させる、豊かで官能的なオリエント風である。そこではまた、本来依拠すべき一次資料であるアンドリューズやアルベルディの記述を蔑ろにしてまでも、恋愛小説である『アタラ』や『ポールとヴィルジニー』の舞台との共通性が強調される。アンドリューズ「少佐」のエピソードは、男性を性的に誘惑する女性としてのトゥクマンを強調し、続いてそこを散策する女性、ついで兵士の命乞いをする女性が登場し、最後にはファクンドの欲望の「目で見られる」女性が登場する。『ファクンド』一巻を通じて、女性が重要な役割で登場するのがこのトゥクマンのパートだけであるということは、注目に値する。トゥクマンを支配しようとするファ

クンドの政治的欲望は、トゥクマンの女性を性的に支配しようとする彼の肉体的欲望と重ね合わせられる。第7章にはトゥクマンの自然環境が形成する住民の性格への言及は全くない。トゥクマンの「女性的」環境は、トゥクマンを「女性」によって象徴するためだけに描写されているのだ。美しく、優しく、貞淑でもあるが、抵抗する気持ちはあっても力を持たない、受け身の存在としてのトゥクマン＝「女性」が、ここでは強調されている。

一方トゥクマンの男性たちは、無力な存在として描かれている。兵士たちは登場する時点で既に敗北を喫し、ファクンドに捕らえられており、少女たちの嘆願にもかかわらず処刑される。未亡人の父親は、最終的にはファクンドの求婚を拒絶するものの、恐怖を辛うじて誤魔化している。しかしサルミエントは、トゥクマンの自然環境が彼らを「女性化」したとしているわけではない。トゥクマンは、その風土の影響を示す典型になるべき「人物＝男性 hombre」すら持たない、男性不在の地方とされているのである。

ファクンドと未亡人のエピソードが意味するものは、そのトゥクマン占領（および続くロサス政権の支配）がこの地にもたらした影響が論じられるところで、明らかになる。砂糖黍や藍、コチニールの栽培・養殖、繊維産業の基盤整備や河川を利用した交通網の整備が内戦以前に進められていた農業都市トゥクマンは、内戦の混乱の中でそのインフラを破壊された。順調に発展していれば今頃はこの豊かな地方がアルゼンチンにもたらしたであろう莫大な富が、かくして失われてしまったのだとサルミエントは批判する。ここにいたって先ほどの性的欲望のメタファーの意味が明らかになる。ファクンドの性的欲望の対象とされた未亡人が、肥沃な自然環境に恵まれたトゥクマンを象徴していたことは、既に述べたとおりであるが、ここでは支配者による土地の「開発」と男性による女体の性的「開発」が重ねられているのだ[*32]。

[*32] 男性＝文化による（性的）開拓を待つ女性＝自然という表象は、イスパノアメリカ文学においては、概してこれほど単純な図式をとっていない。開拓の対象である自然環境が危険で力強い存在であったために、自然を象徴する役割を担わされた女性登場人物は、むしろ男勝りで時には危険ですらある存在として描かれることが多かった。文明を象徴する弱い（しばしば傷ついた）男性と自然と結びつけられる強い女性のカップリングは、エチェベリーアの長編詩「虜囚」やマルモルの『アマリア』、メラの『クマンダ』、ガリェーゴスの『ドニャ・バルバラ』、リベーラの『大渦』などの長編小説と、19世紀から20世紀前半の南米各国の文学作品にみられる。ただしヘルツによれば、メキシコの19世紀文学においては『ファクンド』同様、強い男性＝独立派の保護を必要とする弱い女性＝アメリカという図式が多く見かけられる。Hölz, Karl. “Conciencia nacional y herencia colonial. El orden de los sexos en la literatura patriótica de México”, pp.195－204. 参照。またブラジルのアレンカール『イラセマ』でも、アメリカを象徴する弱い女性とヨーロッパを象徴する強い男性がカップルとなっている。

トゥクマンを象徴する女性は、「未亡人」である。これは一度は性的・経済的開発が進んでいたトゥクマンが、再び「耕す」者（＝男性）なき状態に留め置かれていることを意味する。ファクンドは未亡人＝トゥクマンに欲望を抱くが、その目的は女体＝土地の凌辱に過ぎず、その「生産性」を高めはしない[*33]。「土地はそれを肥沃にすることのよりできるものに属するのだ」と、後にサルミエントはアルジェリア旅行中、フランスによる植民地支配を肯定する文脈で書き記している[*34]。相応しからざる求婚者としてのファクンド像は、相応しからざるトゥクマンの支配者というサルミエントの評価を意味しているのであり、ロサス体制打倒の暁には、ブエノスアイレスからトゥクマンの開発を促進するであろう中央集権派こそ、「彼女」をより「肥沃」にする、理想の男性＝支配者なのだ。

サロモンはサルミエントが、内陸部で1820年代に成長しつつあった、プレ＝ブルジョワジーの利害を代表する立場で『ファクンド』を執筆していることを、作中主張される経済政策や階級意識、資本重視の姿勢などを通して論証している[*35]。しかし実際には、植民地体制下で発達し始めていた、トゥクマンをはじめとする内陸各州の産業は、独立当時未だ脆弱であり、保護を必要としていた。サロモンが引用している1820年代の内陸部の新聞『アンデスの声』の論者は、明らかに保護貿易を訴えており、自由貿易を主張するサルミエントとは立場を異にしている[*36]。もっともサルミエントは、1840年代前半においては、理念として支持する自由貿易主義と、産業保護を目的とした保護貿易主義との間で、揺れ動いていた[*37]。歴史的にみれば、副王領政府の保護貿易政策を覆し、一気に自由貿易へと移行した独立後のアルゼンチン中央政府の政策こそが、外国製品との競争に耐える力をまだ備えていなかった内陸部の産業を壊滅させる元凶

---

*33 ヴィガレロによれば、性と暴力に対する感受性が18世紀末から19世紀初頭にかけて敏感になってゆくにつれて、性暴力を「進歩と文明化」の浸透していない、都市から離れた「田舎における野蛮さ」の表れと見なす考えが、フランスでは生じていた。サルミエントが提示するネガティヴな凌辱者としてのファクンド像は、このような意識の変化を前提としてファクンドの「野蛮」性を強調するものと解釈することができる。ヴィガレロ『強姦の歴史』藤田真利子訳、作品社、101－103, 161－162頁　参照。

*34 Sarminto, *Viajes por Europa, Africa i América 1845－1847*. coordinación de Javier Fernández. Madrid : Archivos, CSIC, 1993, p.184.

*35 Salomon, *op. cit.*, pp.25－74.

*36 *Ibid.*, pp.69－70.

*37 *Ibid.*, p.50.

となったのである[*38]。サルミエントが評価する1820年代内陸部の「発展」は、時のリバダビア政権の発表した経済政策への期待感がイギリス資本を呼び込んだために起きたものだったが、20年代半ばには既に行き詰まりをみせていたのである[*39]。

さて、以上のようにトゥクマンの表象においても、パンパの場合と同様の論理展開の逆転がみられる。トゥクマンが女性として表象されたのは、それが政策次第によって富を生み出す可能性のある土地だったからである。しかしこの土地に発達の可能性をもたらしていた農産物として挙げられている砂糖黍と藍は、自然描写の箇所では全く言及されていない。砂糖黍や藍の育つ環境だからトゥクマンは豊かな土地なのだという描かれ方は、されていないのだ。トゥクマンは豊かな土地である。したがってそれは魅力的な、ただしサルミエントの定義するアルゼンチンの特徴に則り、オリエント風の女性として表象されなければならない。だからこそトゥクマンの自然環境は、官能的なオリエントを思わせるものとして描かれなければならなかったのである。初めに自然環境ありきというサルミエント自身のテーゼとは裏腹に、『ファクンド』においては一貫して、現在の政治状況を説明し、将来に向けての政策を正当化するために、遡って「相応しい」自然環境が設定され描写されているのである。

参考文献

Anderson Imbert, Enrique. *Genio y figura de Sarmiento.* Buenos Aires : Editorial Universitaria de Buenos Aires, 1967.

Barrenechea, Ana María. *Textos hispanoamericanos : De Sarmiento a Sarduy.* Caracas : Monte Ávila Editores, 1978.

Borello, Rudolfo A. "«Facundo» : Heterogeneidad y persuación", *Cuadernos Hispanoamericanos,* no. 263－264, mayo-junio, 1972, pp.283－302.

Carrilla, Emilio. *Lengua y estilo en Sarmiento.* La Plata : Universidad Nacional de La Plata, Facultad de Humanidades y Ciencias de la Educación, 1964.

シャトーブリアン、フランスワ・ルネ・ド『アタラ・ルネ』畠中敏郎訳、岩波書店、1938.

---

*38 Lynch, *Las revoluciones hispanoamericanas 1808-1826.* traducción de Javier Alfaya & Barbara McShane. Barcelona : Editorial Ariel, 1983 (3a ed.), p.79.

*39 *Ibid.,* pp.90－93.

フーコー、ミシェル『監獄の誕生——監視と処罰——』田村俶他訳、新潮社、1977.

González Echevarría, Roberto. *Mito y archivo.* traducción de Virginia Aguirre Muñoz. México D. F. : Fondo de Cultura Económica, 2000.

花方寿行「D. F. サルミエントのオリエンタリズム——『ファクンド』における「野蛮」表象をめぐって——」『ラテンアメリカ研究年報』17号（1997)、pp.108－129.

Hölz, Karl. "Conciencia nacional y herencia colonial. El orden de los sexos en la literatura patriótica de México", en Friedhelm Schmidt-Welle ed. *Ficciones y silencios fundacionales : Literaturas y culturas poscoloniales en América Latina (siglo XIX).* Frankfurt am Main, Madrid : Vervuert, Iberoamericana, 2003. pp. 189-210.

Lorenzo-Rivero, Luis. *Larra y Sarmiento: Paralelismo históricos y literarios.* Madrid : Guadarrama, 1968.

Lynch, John. *Las revoluciones hispanoamericanas 1808-1826*. traducción de Javier Alfaya & Barbara McShane. Barcelona : Editorial Ariel, 1983 (3a ed.).

Martínez Estrada, Ezequiel. *Sarmiento.* Buenos Aires : Argos, 1946.

Salomon, Noël. *Realidad, ideología y literatura en el "Facundo"* de D. F. *Sarmiento,* Amsterdam : Editions Rodopi, 1984.

サン・ピエエル、ジャック・アンリ・ベルナルダン・ド『ポオルとヴィルジニイ』木村太郎訳、岩波書店、1973.

Sarmiento, Domingo Faustino. *Facundo. Civilización y barbarie.* edición de Roberto Yahni. Madrid: Ediciones Cátedra, 1993 (2a ed.).

---- *Facundo. Civilización y barbarie. Vida de Juan Facundo Quiroga.* prólogo y cronología de Raimundo Lazo. México D. F. : Editorial Porrúa, 1998 (10a ed.).

---- *Facundo o civilización y barbarie.* prólogo de Noe Jitrik, notas de Nora Dottori & Silvia Zanetti. Carácas: Biblioteca Ayacucho, 1977.

---- *Campaña en el Ejército Grande. edición,* prólogo y notas de Tulio Halperin Donghi. México D. F. : Fondo de Cultura Económica, 1958.

---- *Recuerdos de provincia.* Buenos Aires : Editorial Sopena Argentina, 1966 (10a ed.).

---- *Viajes por Europa, Africa i América 1845－1847.* coordinación de Javier Fernández. Madrid : Archivos, CSIC, 1993.

Sommer, Doris. *Foundational Fictions : The National Romances of Latin America.* Berkeley, Los Angeles, Oxford : University of California Press, 1991.

Verdevoye, Paul. "Costumbrismo y americanismo en la obra de D. F. Sarmiento", *Sur,* no. 341, julio-dic., 1977, pp.55－69.

ヴィガレロ、ジョルジュ『強姦の歴史』藤田真利子訳、作品社、1999.

柳原孝敦「恋愛、植民地、小説――十九世紀イスパノアメリカ恋愛小説――」、中島成久編『「植民地主義の再検討」研究会　2001年度ワーキングペーパー』法政大学比較経済研究所、2002、pp.43－58.